

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	今福 理博
論文題目	乳幼児における言語獲得と社会的認知の発達の関連についての実証的検討		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>ヒトは生後初期から他者の顔や声に感受性を示す。このような社会的認知能力は、言語の学習過程に影響を及ぼすとみられる。乳幼児を対象とした言語獲得研究の多くは、音声という単一感覚情報の知覚に焦点を当ててきた。しかし、日常場面では視覚情報 (口の動き) と聴覚情報 (音声) という少なくとも2つの感覚様相 (モダリティ) を統合処理して音声言語は理解される。本研究は、発話に含まれる知覚処理が、乳児期の語彙獲得にどのように関連するかを実証的手法を用いて検討したものである。本論文は、全6章から構成された。</p> <p>第1章では、ヒトの言語の系統発生と個体発生にかんする理論を概観した。社会的認知が乳児期の音韻学習、語彙獲得の発達の基盤であるとする「ソーシャルゲーティング仮説」を取り上げ、模倣能力との発達の関連から論考した。</p> <p>第2章では、乳幼児の発話知覚と語彙獲得との発達の関連を概説した。語彙獲得に影響するとみられる発話知覚の発達に、出生後の環境経験 (発話スタイルや早産での出生に伴う異質な周産期経験) がもたらしうる影響については看過されてきた点を指摘し、本論文で実証検討すべき課題を具体的に示した。</p> <p>第3章では、生後6ヶ月、12ヶ月の満期産児と成人を対象に、発話知覚の発達過程、および語彙獲得との関連を検証した。加齢にともない、乳児は視聴覚情報が時間的に不一致な話者の口に対する注意を高め、また、生後6ヶ月で口を長く注視する乳児ほど、12ヶ月時点で語彙理解能力が高いことが明らかとなった。章の後半では、発話知覚と音声模倣の関連を検証した。発話者の正立—倒立顔、2種類の視覚刺激を提示することで視覚入力情報を操作し、音声模倣の産出が両者で異なるかどうかを検討した。その結果、倒立顔条件に比べて、正立顔条件でその傾向が強いことが明らかとなり、(1) 視聴覚情報の統合が音声模倣を促し、(2) そうした発話知覚能力が音声模倣の発達に寄与する可能性が示された。</p> <p>第4章では、発話知覚の促進に影響を及ぼす環境要因として、大人の発話スタイルに着目した実証的検討を行った。生後6ヶ月、12ヶ月の満期産児を対象に、「対成人発話」「対乳児発話」「歌いかけ」という3条件からなる発話映像を視聴中の乳児の視線反応を記録解析したところ、口の動きと音声抑揚がもっとも顕著な「歌いかけ」条件で、乳児は話者の口を長く注視した。大人の誇張した発話が、口への注視、語彙獲得に必要な学習の機会を促進する可能性を指摘した。</p>			

第5章では、周産期の環境経験が発話知覚に及ぼす影響について検討した。周産期の養育環境が異なる早期産児（NICUで育ち始めた児）と満期産児を対象とし、発話の視聴覚情報処理の発達を比較した。その結果、(1) 早産児では、生後6ヶ月以降の満期産児でみられる、視聴覚情報が一致した話者への選好が認められないケースが多い、(2) 早産児は話者の顔に対する注視時間が短い、(3) 両群ともに、6ヶ月児時点で視聴覚情報が時間的に一致した話者への選好が強いほど、12、18ヶ月児時点の語彙理解能力が高いことが示され、早産児は発話知覚能力に脆弱さを抱えている点が示された。さらに、「人への視覚的注意・興味」や「視線追従」においても、早産児は満期産児と異なる発達過程をたどるケースが一定数みられ、周産期の環境経験が、乳児期における発話知覚能力の発達や語彙獲得、社会的認知の基礎となる人への興味や視線追従能力の発達に影響する可能性を示した。

第6章では、社会的認知を基盤とする乳幼児期の言語獲得の発達過程について、自らによる実証研究からの新たな知見を整理した。発話知覚能力は、ヒトの言語獲得において重要な役割を果たすこと、その過程では、大人の発話スタイルや周産期の環境経験が影響する可能性を指摘した。今後の課題として、実験室という閉ざされた場面だけでなく、日常場面で展開される動的で複雑な発話知覚の検証やそれを可能にする方法論の提案、発話の産出と環境要因との関連の検証などを挙げた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、乳幼児における発話の視聴覚情報を統合する能力（発話知覚）と語彙獲得との発達の関連、および、大人の発話スタイルや生後の環境経験がもたらしうる影響について、実験的手法を用いて検討したものである。

本論文の特色は、以下の3点にまとめられる。

- (1) 乳児期にみられる語彙獲得は、従来、連合学習や統計学習、社会的学習などによって理論的に説明されてきたが、「社会性刺激の多感覚知覚」という視点から新たな仮説を提示し、当該領域に理論的インパクトをもたらした
- (2) 語彙獲得にかんする既存の実証研究は、音声（聴覚情報）知覚のみに焦点が当てられてきたが、発話知覚が果たす役割とその環境要因との関連を見出し、当該分野における新たな視座を提示した
- (3) 発話知覚の個人差が語彙獲得を予測しうる知見を見出したことで、発達評価法の開発、育児支援や療育方法の提案に寄与する可能性を示した

第1章では、言語の系統発生と個体発生について、その理論的背景を概観するとともに、乳幼児期の社会的認知発達との関連を検討した。ヒトの語彙獲得の過程を社会的認知との関連から検討した研究はこれまできわめて限定的である点を指摘し、乳児が発話者から語彙を学習する過程の解明に向けた新たな視点を提示した。

第2章では、視聴覚情報を含む発話知覚と語彙獲得との発達の関連を概説、検討した。なかでも、発話知覚の発達過程に影響しうる環境要因（大人の発話スタイルと周産期の環境経験）に着眼し、乳幼児の語彙獲得を個体—環境の相互作用から包括的に捉えようとする試みに、本論文の独創性がみてとれる。

第3章では、乳児期の語彙獲得における発話知覚の発達の役割を検討した。発話内に含まれる視聴覚情報処理が、乳児期の語彙理解や音声模倣に影響することを実証した、斬新な成果である。

第4章では、大人からの「歌いかけ」が、乳児期の発話知覚を促進することを解き明かした。大人が乳児に対して無意識に行うことの多い発話の誇張が、乳児の語彙理解を促すという機能的仮説を実証的に裏付けた重要な成果である。

第5章では、周産期の経験が乳児の発話知覚に及ぼす影響について、通常満期産児とは異なる環境(NICU)で育ち始める早期産児を対象とした実証的検討を行った。少なからぬ数の早産児において、発話知覚、社会的刺激に対する注意機能の発達過程が満期産児のそれとは異なること、早産児における発話知覚の個人差が、後の語彙獲得と関連することを実証した。これらは、1年以上に渡って乳児を追跡調査したことによって初めて明らかとなったきわめて貴重な成果である。

第6章では、第3～5章の知見を整理し、発話知覚の発達過程およびそれに影響しうる環境要因を組み入れ、語彙獲得の概念モデルを提案している。このモデルは従来にはない着眼点から語彙獲得を説明しようとするものであり、かつ実データを基盤としている点において高く評価できる。このモデルは、語彙獲得の理論化に貢献するだけでなく、発達評価や支援、療育方法の提案にも寄与しうる。

本論文の中核となる研究成果は、それぞれ『*Infancy*』、『音声研究』といった国内外の一流学術雑誌に掲載され、乳幼児における語彙獲得の理論および方法論の両面において斬新な知見を提供してきた。

他方、今後に残された改善点として、以下の点が指摘できる。

- (1) 提案した語彙獲得に関する概念モデルについては、発達軸にそって軌跡、個人差を予測しうるレベルを目指し、そのメカニズムや機能をより慎重に検討すべきである
- (2) 環境要因が発話知覚に及ぼす影響について、その因果関係をより丁寧に検討する必要がある
- (3) 語彙獲得と言語獲得との発達の関連の考察を深化させる必要がある

しかし、こうした点は、本論文の価値を根本的に減ずるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年3月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降